

九十九コレクション「富士浅間」扁額の由来

〈静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 教授 大高 康正〉

令和4年(2022)12月に静岡県富士山世界遺産センター開館五周年記念展「博士の愛した富士山～フレデリック・スタールと九十九コレクション」展を開催しました。アメリカの人類学者フレデリック・スタールと、その助手兼通訳をつとめた九十九黄人(豊勝)を紹介する展示会です。

この展示会の開催により、フレデリック・スタールや九十九黄人、さらには彼らが関わってきた日本文化について研究する各分野の方々との御縁をつなぐ機会となりました。この際に紹介した資料を含んだ九十九黄人旧蔵の富士山関係資料については、子息の九十九弓彦氏により令和5年度に静岡県富士山世界遺産センターへ寄贈いただいています。資料は一枚物とした手紙や千社札などの印刷物、冊子体の書籍類、スタール自筆の墨跡や富士講の教義関係の掛軸、卷子類、工芸品、富士講の布製マネキ類など、約3700点に及ぶ大変貴重な資料群です。この寄贈を機会として、令和6年3月には雄山閣より『富士山学』第4号を刊行し、「お札博士フレデリック・スタールと日本文化」と題した特集を企画しました。スタール、九十九黄人、東洋民俗博物館、千社札などについて取り上げています。是非、ご一読ください。

今回寄贈いただいた九十九コレクション富士山関係資料の中に、令和4年度の「博士の愛した富士山」展でも展示紹介した「富士浅間」扁額があります〔写真1〕。この扁額は、裏面に享保4年(1719)に江戸本郷春木町の大猿坊という講により奉納された旨が記されていました。本郷春木町は、東京都文京区の東京大学のそばに位置しています。また、東京大学の赤門(かつての加賀藩下屋敷)裏手には、「本郷富士」と呼ばれた富士塚が存在していましたが、昭和39年(1964)頃に取り壊されています。こういった理由から展示会では、「富士浅間」扁額は富士塚取り壊しの際に祀られていた神社の扁額を黄人が収集した可能性が考えられる、と紹介していました。



写真1 「富士浅間」扁額(九十九黄人富士山関係資料コレクション)

今回、寄贈いただいた九十九黄人富士山関係資料コレクションの中に、この「富士浅間」扁額の由来について語った新聞記事の切抜があることを発見しました〔写真2〕。何新聞かは残念ながら切抜部分に記載がないのでわからないのですが、昭和30年(1955)5月14日付「ご自慢くらべ 私のコレクション」という記事で、九十九黄人富士山関係資料コレクションを収蔵していた九十九邸裏山にある富士文庫内で撮られた写真とともに紹介されています。ちなみに、この写真原本も九十九コレクションに残されています〔写真3〕。記事の写真では画角的に扁額が写っていないのですが、別アングルの写真をみると黄人の頭上に「富士浅間」扁額が確認できます〔写真4〕。実際に私が展示会準備のため富士文庫内へ調査に入らせていただいた際にも、この写真と同じ場所に扁額はあり、令和4年まで同じ場所に掛けられていました。



写真2 新聞記事切抜(九十九黄人富士山関係資料コレクション)



写真3 富士文庫内写真①(九十九黄人富士山関係資料コレクション)

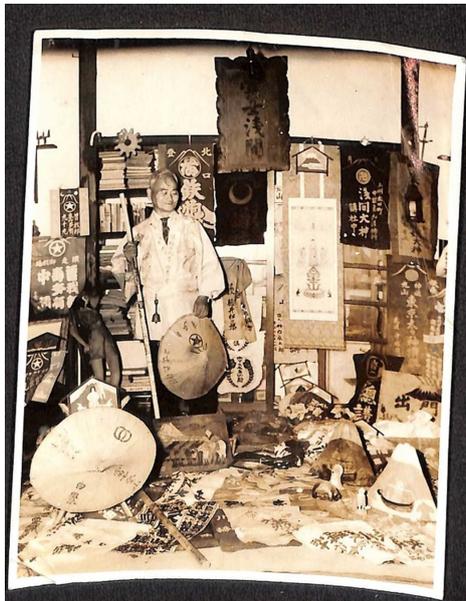


写真4 富士文庫内写真②(九十九黄人富士山関係資料コレクション)

この記事によると九十九黄人は扁額について、「富士山登山口の浅間神社に掛つていた「富士浅間」の額がある」として、具体的にどの登山口の浅間神社かは書いていませんが、続きを読むと理解できそうです。「九十九さんの手に入るまでずっと神社に掛つていたもの、大正七年、現在の天皇がまだ皇太子の時分、富士登山をされた、ところが浅間神社へ参拝されることになり、ちよつとひと悶着が起つた、この神社の額があまりに古いのだ、そこでもしこれが落ちて皇太子に負傷させてはいけないと新しいのと替えた、それをうまく手に入れたというワケ」とあります。

記事には大正7年(1918)に富士登山をした皇太子とありますが、大正年間に富士登山をした皇太子とは後の昭和天皇を指しています。ただ富士登山をした年代は大正7年ではなく大正12年(1923)のことで、須走口登山道から登山しました。現在も須走口登山道の登山口付近にこの際の登山記念碑が残っており、また「皇太子殿下富士御登山御英姿」という絵葉書も刊行されています(当センター所蔵小林謙光富士山資料コレクション)。

記事の年代には間違いがあるようですが、この扁額は須走口登山道の登山口の起点にある東口本宮富士浅間神社(須走浅間神社)に掛けられていたものと考えてよさそうです。富士山須走口は、フレデリック・スタールが計5回の富士登山を行った際に利用していた登山道で、彼は須走地区にあった大米谷旅館を定宿としていました。須走地区にはスタール没後に遺骨を分骨・埋葬した慰霊碑も建てられています。九十九黄人もスタールに同行した際に大米谷旅館を利用していた関係で、スタール没後も宿主の米山家との交流は長く続いていきます。

九十九邸には、現在も須走口登山道沿いに立てられていたと思われる丁目石の「九十九丁目」分が残されており(大高「須走口登山道の丁目石」参照、富士山世界遺産コラム 2023年5月号)、「九十九丁目」の丁目石も「富士浅間」扁額も、黄人が須走地区との関係性を構築していたからこそ、そのコレクションに加えることができたものと思われます。

【参考文献】

・静岡県富士山世界遺産センター編『富士山学』第4号(雄山閣、2024年3月)。